

# ストーリーで巡る 新田地区周辺の歴史文化

新田地区は、赤穂城下から西の備前や北の有年へ向かう街道の結節点に位置します。また、かつては海岸がすぐそばまで迫っていましたが、自然の営力や人々の努力によって陸地化され、村や水田、塩田が開発され、人々が生活できるようになったという歴史があります。

## ストーリー 1 開拓ものがたり

「大津」という地名は、かつて港があったことから名づけられたと考えられています。堂山遺跡の発掘調査によって、現在の山陽自動車道赤穂 I.C. 周辺が海辺となっていて、平安時代に塩田が築かれていたことが判明しています。

その後、この地は江戸時代初期に本格的に開発され、播磨一国を治めた池田家によって西浜塩田が築かれました。この塩田は浅野家、森家へ引き継がれるとともに拡大し、最終的に西浜塩田は面積にして 250ha を誇るまでに became.

また江戸時代前期に赤穂を治めた浅野長直は、旧赤穂上水道の一部を農業用水に利用することにより約 100a もの戸島新田を開拓しました。この新田開発の際できたのが戸島新田村、五軒村、十五軒村、七軒村です。戸島新田と戸島用水は約 250 年経った現在でも使用され続けています。



戸島新田



戸島用水



銅ヶ森神社

## ストーリー 2 播磨・備前国境と交通路

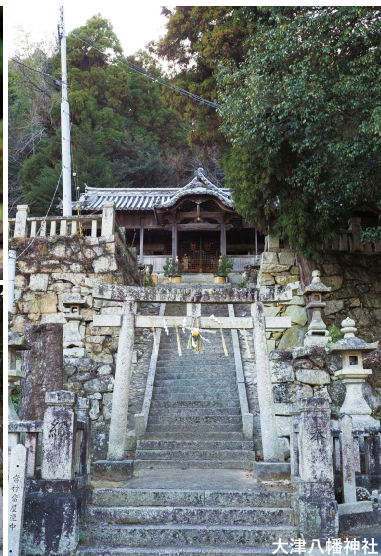
江戸時代、赤穂城下から塩屋村、新田村を経て大津を通り抜け、帆坂峠を越えて西の備前国へ至るまでの道は「備前街道」と呼ばれ、西方面に向かう際に最もよく利用された道でした。

現在もこの街道は、新田地区では旧道、大津地区では県道 96 号が同じルートとして、その多くが利用され続けています。

一方、新田から海沿いのルートは折方、鳥撫・真木（頰和）を通り、鳥打峠を越えて備前へと至る街道も存在し、現在は国道 250 号となっています。さらに、大津から北へ山越えて抜けて西有年横山へ向かうルートがあり、地蔵がその存在を教えてください。こうした街道沿いや集落の背後の山裾には、各村の鎮守、社寺や道標、石碑、地蔵などが建ち、当時の景観を偲ぶことができます。



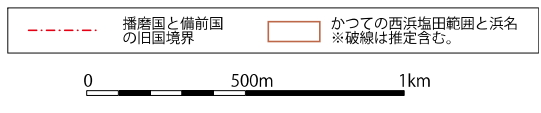
新田居村の道標



大津八幡神社



木生谷荒神社



ここに掲載したストーリーは「赤穂市歴史文化基本構想」の成果をまとめたものです。

塩屋の歴史文化

西部の歴史文化

令和4年2月 赤穂市教育委員会